

## ロマン派の観点から見た ヴェルディのオペラ『ドン・カルロス』

織 田 繁 美

第二幕第二場第三節でテノール（ドン・カルロ）が幻想的な気分で幻惑されながら、《あの方の声だ！…私の体が震え…私には…見えた気がする…帝の影法師だ！（修道士の）法衣の下に、王冠と黄金の胴よろいが隠れている》と歌う。この場景を文学史的にみると、ロマン派の中でも第二の時期、デカダン派の形態が表現されている。ロマン派に特徴的な《個人崇拜》の導入として帝カルロ五世があり、《神秘的で、脅威的なものへの偏愛》として、全く予期しなかった祖父の帝が修道士の姿で目前に現れた。この修道士を帝の二重写しの表現として打ち出したロマン派作家の思想史的な根拠は、《個々の物の本性は変えられない》、かつ、それとは別の物の本性は、《それに没頭する人間の精神によって変えられる》という考え方にあると見てよいであろう。この見解に立つと、帝も修道士も別々の個性を持つ人間であるが、修道士が僧院で帝の霊の救済を願って祈祷に専念することによって、修道士の身に神秘的な変化が生じ、ドン・カルロには修道士の言葉が帝の言葉として、修道士の姿が帝の姿として感じ取られるようになったと考えられる。しかし後世のイタリア文学史家の目にはこの詩節の展開は好意的には見られていない。ロマン派の作家たちは過去の独裁を震撼させたが、好ましい未来表象を思い描いていない。自分たちが抱いている自由への熱望の基礎を単に《個人》におき、人間を無限の世界に連れ戻し得るという信念を手探りするという試みをしたに過ぎない。かくして彼らは過去に後退し、はじめは中世を目指し、次いで神秘主義に走ったというのである。